

横浜居留地のフランス社会（3）

—— 幕末・明治初年を中心として ——

澤 護

承前

1. 開港当初のフランス人

最初のフランス商人・ガルニエ

横浜天主堂と二人の神父 ジラールとムニクゥ

生糸商 ブーレ

レーデルマンとコンスタンスウ

グチョー

ベリクー

ブレッキマン

絹商人 ジャクモ

2. 1862年版ディレクトリーにみるフランス人
3. フランス領事館員および同公使館員
4. フランス系大手生糸輸出商社
5. フランス海軍病院
6. フランス郵船横浜支店
7. 幕末期に横浜へ進出した外国銀行（パリ割引銀行）

8. 「レコー・デュ・ジャポン」とC.レヴィー

本邦最初のフランス語新聞である「レコー・デュ・ジャポン」(L'Echo du Japon)は、現在のところ1875年(明治8)5月19日の1,599号より1885年11月28日の終刊号となった4,294号までの原紙が保管されている。最終号の4,294号だが、途中の通し番号に重複する誤りが認められるので、その番号は4,774号が正しいと判断される。

本紙の創刊号は1870年5月ないしは6月頃と推定されたり、あるいはまた同年1月ではなかったのかともいわれてきた。この1月の根拠は、横浜で発行されていた英字紙が1月下旬の号で「レコー・デュ・ジャポン」紙が刊行されるという記事を掲載したからだが¹⁾、これをもって創刊を1月だったとするわけにはいかない。この時の英字紙の記事は、その刊行を歓迎しながらも、居留地に住むフランス人が非常に少ないのに、はたして発刊が継続できるのかと訝るものであった。

「レコー・デュ・ジャポン」は当初年極め20ドルで、日曜日を除いて発行される日刊紙であったので、1875年5月19日の1,599号が正しい通し番号で、さらにきちんと発行されていたものという前提をつけて逆算をしていけば、1870年(明治3)4月9日(土)がその創刊日だったということになる。

本紙には日刊紙とは別に、郵船の運行に合わせて発行する総合版があった。つまり、横浜に入港した郵船の復路の便に合わせ、日刊紙の記事の中から主要で、しかも本国に住む人たちの関心がありそうなものや、フランス人の動向を示すものを纏めた船便版「エディション・ド・ラ・マル」(Edition de la Malle)であった。この船便版は年極め8ドルで、フランス郵船ばかりでなく、イギリス郵船にも積み込まれたので、年になん回発行されたのか簡単に割り出すことはできないが、現在まで1870年10月8日(土)の16号を最も古いものとして確認している。横浜出航の仏・英郵船

の全てにこの版が積まれたとすれば、1870年6月7日出港のフランス郵船・ラブールドンネ号でのマル版が第1号だった公算が強い。これらの日付は創刊号が発見されると簡単に解決できることなので、より古い号をさらに捜がしだしたいものである。

「レコー・デュ・ジャポン」紙の社主・編集責任者は、発行15年の間に①C.レヴィー、②L.レヴィーとS.サラベル、③S.サラベルと代替りをしたが、三者の間には記事内容、編集方針、広告内容に特筆すべき変化はなら認められず、一貫して同じ体裁を保っている。

① C.レヴィー

レヴィーの名については若干の疑問が残るが、Cerfだったとみなされる。Cerf Lévyと姓名が書き残されている記録はふたつあり、そのひとつは1869年版の『チャイナ・ディレクトリー²⁾』であり、もうひとつは1880年の裁判資料である。³⁾レヴィーの名前はユダヤ人に多い名なので、かなり積極的にユダヤ系の人たちにこの名を調べてもらったが、期待していた解答は得られなかった。

C.レヴィーについての調査はこれまで全くなされていないが、1874年（明治7）に印書局への就職を願い出た際に、彼の提出した届により若干の略歴を知ることができる。これによると、「(セー・レーピーは) ストラズブールノ工術学校ニ学業ヲ受ケ、四年間同府ノシルベルマン氏ノ版刻所ニ勤メ、又ミルーズ府ニ於テ独乙の版刻規則ヲ覚悟セシ後、巴里斯ノ大印書局ニ試験ヲ経テ入ルヲ許サレ、八年間同局在勤シ、且仏蘭西ノ属國セーゴンの印書局ヲ総管シ右出役中セーゴンノ気候不適ナルニ犯サレ病氣ヲ醸シ、終ニ不得止横濱へ住居ヲ移シ、私ノ版刻所ヲ開キシ⁴⁾」とある。

これを基に他の部分的な記録などと組み合わせると、C.レヴィーはアルザス地方に生まれ、ストラズブールの工業学校を卒業すると、同地の印刷所に4年間勤め、さらにパリの印書局で8年間植字・活版の技術を修得

し、1865年（慶応元）にサイゴンの印書所の責任者として迎え入れられたものの、ここでの気候が彼の体に合わず、2年半ほどでこの地を切り上げ1868年に横浜に居を移し、ここで活版所を開いて新聞を発行する傍ら、仏・英・独・日本語の書籍を出版したと相い成る。1874年の段階で、彼は活版関係の職について20年になると語っているので、来日した時は40歳に近い年齢だったと推定される。

1868年（明治元）3月18日に横浜入港したフランス郵船・フェーズ（Phase）号の船客に「Cerf-Leoz」なる名前があり⁵⁾、この人物がC.レヴィーに間違いのないものと考えられる。来浜するとすぐ、彼は英字新聞を発行していたジャパン・タイムズ社の植字工として雇用されたが、タイムズ社は1869年に経営が怪しくなり1870年1月にジャパン・メール社に買収された。丁度この頃、レヴィーは独立して極東に於ける最初のフランス語新聞「レコー・デュ・ジャポン」を発行する計画を立て、これが1月下旬の英字紙に公表されたのであった。

「レコー・デュ・ジャポン」紙の創刊は先に示した通り1870年4月9日かと推定しているが、同社は1870年の初頭には設立されていて、同年3月刊行の「ディレクター」⁶⁾にはすでに居留地183番に同社の名が掲載され、C.レヴィーとルグラン（Hermann Legrand）の2名が所有者として記録されているほか、5名の外国人の名前も掲げられている。

レコー・デュ・ジャポン社・印刷所は1876年5月27日より同8月27日までの3ヶ月間、この183番に二階建ての新社屋を建築中はスイス領事館隣の90番に仮り移転をしたものの、1870年から1883年までは一貫してこの地番にあった。ここでの職種は新聞発行の他に、名刺・案内状・手形・契約書類の印刷、書籍の出版と新刊書の取り次ぎ販売、貸し本、万年筆・ペン・インキ・定規・封筒・便箋等の文具類、各種用紙の販売をもしていた。

1874年に弟のレオン（Léon Lévy）の来日が決まると、レコー社を弟に任せ自らは東京の正院・印書局に植字技術の熟練者との触れ込みで、左院

雇いのデュ・ブスケ（Albert C. Du Bousquet）の紹介・保証書を携え、同年7月に月給450円という高給での採用を願いでた。印書局には印刷技術全般に長たアメリカ人のボイントン（C. S. Bointon）がいたが、彼は1874年6月に同局を辞めたのでボイントンの後任として格好の時であった。

印書局では1874年9月2日よりC.レヴィーを出頭させ、印書局構内に仮寓させて試験的に仮り雇いをし、慰労金の名目で月給100円を支給することにした。しかし、印書局側では同年10月9日に「（横浜在留の仏人）レビー試験候処植字一課ヲ専ラ熟業ノ者ニテ其他諸業不充分ニテ不致相当候間本条約不取結雇差止候⁷⁾」との理由により、彼の雇い入れを見送った。

技倆不足として本採用にならなかったC.レヴィーは1874年9月2日より10月5日まで印書局で働いたにもかかわらず100円の慰労金では不十分であり、月給450円として不足金350円を支払えと申し入れをし、結局1875年6月19日に印書局では「放免節謝金不足ニ付更ニ三五〇円ヲ贈ル⁸⁾」はめになった。仮契約の際には1カ月100円の慰労金を遣わすとなっていたのに、最終的に450円を支払うことになったも、レヴィーからの執拗な食い下がりがあってのことと文書から読みとれる。

横浜に戻ったC.レヴィーは自社の事業に専念し、新しい社屋を建築したりしていたが、1876年8月下旬に新社屋が落成し一段落すると、この年の9月28日にアメリカ郵船・アラスカ号に乗船し、アメリカ経由で11年ぶりにフランスの故郷へと一時旅立った。この旅立ちを伝える記事によると、彼は11年間で極東で過ごし、その内の2年間はサイゴンにいたと報じているので、彼の来日は先に記述した通り1868年であったと裏付けられる。⁹⁾

7、8カ月の間横浜を留守にする予定であったが、C.レヴィーはマルセイユからフランス郵船に乗り1877年8月16日に11カ月ぶりに横浜に戻ってきた。この間のレコー社は弟のレオンに任せられ、新聞の編集も弟の手で成されていったが、紙面に変化はなかった。また、兄の帰国後の記事にも新しい企画はみられず、従来通りの紙面のままであった。

1874年に絹検査官として来日したアルマン（Auguste Harmand）は、1876年よりレコー紙の発行責任者として同社に迎え入れられたが、3年後の1879年5月をもって同社を辞めると、すぐ翌6月16日よりレコー紙の競争紙となる仏字紙「クーリエ・デュ・ジャポン」（Le Courrier du Japon）を発行した。1880年の横浜居留地のフランス人は、表¹⁰で示したように100名を少し越すだけの人数しかいなかっただけに、フランス語の新聞が2紙もあっては共存できるはずがないのに、あえてアルマンがそれに踏み切ったのは、よほどレヴィーに対する憤懣が鬱積していたからなのであろう。

これが不満であったレヴィーは自紙で、相手のアルマンやアルマンの背後にいたアントワヌ（Emile Antoine）を中傷する記事を掲載し、これに端を発して両紙はお互に中傷・誹謗する記事を第1面に載せ、横浜における小さなフランス社会を二分しながら、遂には領事館裁判へと進展していった。この両紙の誹謗合戦の記事や領事館裁判の記録、さらにこれらを伝える英字紙と邦字紙の記事を合せるとかなりの分量に上るが、ここでは邦字紙に掲載された一部を転載するに留める。

「兼て佛國領事廳にて度々對審ありし横濱佛字新聞エコー、ジユ、ジャポン新聞の社長兼編輯長レウイ氏とクーリエ、ジユ、ジャポン新聞のアントアヌ氏との間に生したる詞訟も落着になり。レウイ氏（被告）の申分立たずして、五十フランクの罰金を申付られたることハ一昨日の紙上に記せし通なるが、此詞訟ハ随分入組たる詞訟にて、其というも、本ハ兩造とも同くエコー新聞の社員にて、先頃互に議の合ざるよりアントワヌ氏ハ分離して、今のクーリエ新聞を開きたることなれば、常にても兩新聞の紙上、殊にクーリエ新聞の紙上などとは何かにつけ讒謗らしき事のみ記載して、殆とんと讀むを厭ふ如きことも多かりしが、此度の詞訟も全く互の遺恨より起りたるなりと今其判決文を左に反譯せり。

判決

日本横濱ニ在ル佛國領事裁判所ハ原被兩造ヲ審問シ，法律ニ從テ公明ニ初審判決ヲ與ヘントス。

此詞訟ノ要領ハ「エコー，ジユ，ジヤポン」新聞社長兼編輯長セ，レウイハ去一月二十七日刊行ノ紙上ニ「ア子トン」氏ノ寄書ト題シタル「汝ハ一好人物ヲ知ラザルカ」ヲ以テ始メ，「是レ豈ニ新聞記者歟」ノ語ヲ以テ終リタル一篇ヲ登録シタルヨリ生シタル詞訟ニシテ，此寄書ノ要旨ハ三點アリ，而シテ第一第三ハ此一篇ヲ送寄シタル者カ指示シタル人ノ榮譽ヲ痛ク毀傷セリ。故ニ，レウイガ其紙上ニ於テアントアヌヲ指示シタルニ非スト記シタリト雖モ，此寄書ニ因テ讀者ノ心中ニ起シタル銘記ヲ取消スヘキ効ナキモノトス。因テ，裁判所ハ出訴人ハ果シテ一個人トシテ讒謗セラレタルカ，將タ一般其職務ニ關シテ讒謗セラレタルカヲ審理セシニ，出訴人ハ一般職務ニ關シテ讒毀セラレタルヲ訴訟スルニ非ザルカ故ニ，之ヲ一個人ニ關シタルモノト看做スベシ。一個人ニ向テナセン讒毀ハ，一千八百十九年五月十七日決定ノ法律第十八條ニ向テ罰セラルヘシ。其ノ法律ニ曰，一個人ヲ讒毀スル科ハ十五日以上一ケ年以内ノ禁獄，及廿五フランク以上二千フランク以内ノ罰金ヲ科ス。但シ，事宜ニ因リ單ニ其ノ一ヲ科スルコトアルヘシ。今又，アントアヌカ請求スル損失ノ要償ヲ審理スルニ，讒毀ニ因テ生シタル損害ハ金錢ノ利益を損害セシニアラズ，又名譽ノ損害ハ之ヲ回復シタルニ因テ補償スルコトヲ得ベシ。此等ノ理由ニ因テ，レウイニ科スルニ五十フランクノ罰金ヲ以テス。且レウイガ去月廿七日刊行ノ「エコー」新聞及二月七日每郵船發行ノ新聞ヲ一葉タリトモ公賣，若ハ配布スルヲ禁ス。且ツ此判決ハ日々發行，若ハ毎週發行ノ「エコー，ジユ，ジヤポン」新聞ノ内ヘ登録スヘキヲ命ス。此判決ハ更ニ他ノ詞訟ニ向テ例証トナス可ラズ。詞訟入費ハレウイヨリ拂ウ可シ。右ハ一千八百八十年二月十八日佛國領事廳ニ於テ，首座在横濱佛國領事アツシユ，ピエール氏，列座アドウーズ氏，アツシユ，

ウイ子イ氏ニ由テ判決セラレ，且ッ首席判事ハ職務ニ因テ判決セン旨ヲ
記ス。」¹¹⁾（句読点は筆者）

「郵便報知新聞」のこの記事に関し，明治13年2月23日号の同紙でさらに続報が掲載されたが，これは省略した。この記事は，1880年2月19日の「レコー・デュ・ジャポン」紙の第1面に掲載された判決文をフランス語から邦訳したようだが，かなり正確な訳文となっている。記事中になん度までてくる「詞訟」は訴訟の誤植であろうが，これらの点や誤訳と認められる個所も訂正を加えなかった。なお，「首座アツシユ，ピエール氏」とは，この時の裁判官Henri Pierretで，「列座アドウーズ氏，アツシユ，ウイ子イ氏」とは，陪席者のA. DevèseとH. Vinayのことである。

明治初め欧字紙で一番読まれていたのは「ジャパン・ヘラルド」だったらしく，ここで働いていた日本人の話によると，印刷枚数はそれでも250～270枚位で，最も多く印刷した時でさえ450枚しか摺らなかったという。¹²⁾最も勢力があった英字紙でさえこの程度の印刷部数であれば，レコー紙などはおそらく100部も発行していなかったに違いなく，まして後発のクーリエ紙の場合はさらに少ない部数であったことは容易に理解される。誹謗記事が掲載されていた時は宣伝にもなり部数が増えたいが，これとて高が知れていたろう。

C.レヴィー対アルマンの裁判もひとつの決着をみて間もなく，レヴィーは1880年4月26日付の告示で「日本を留守にする間，L.レヴィー氏に委任代行権を与える」¹³⁾と発表し，同4月28日のフランス郵船に乗船しフランスへ向かった。この時，兄は弟に読者の信頼を失うなと言ひ残し，体力回復を求めアルザスの空気を吸うための旅立ちであった。

しかし，C.レヴィーはそのあと日本に戻ってくることもなく，これが日本との別離であったが，邦字新聞では次のような記事を書いている。

「横濱なるエコー・ジュ・ジャツポン（佛字新聞）の社長レヴィー氏は一昨日同港拔錨の佛船にて帰國されしと」¹⁴⁾

「横濱にて刊行する‘エコー、ジュ、ジャボン’新聞の社長兼出板人なるレウイ氏ハ、病氣にて一昨日出帆の郵船‘ウオルガ’号に乗組み帰国せり。同氏は始めて日本で佛字新聞を發兌したる人にて、久しく日本及び交趾に在留し勤勵少なからざりしより、遂に病を醸し医師の診断を請しに迎も、本國に帰らずハ全快覺束なかるべしとのことゆゑ、此度の郵船にて帰國せしなりといふ。」¹⁵⁾（句読点は筆者）

「東京横濱毎日新聞」より「郵便報知新聞」の方がはるかに記事内容は濃く正鵠なのは、後者の記者の中にレコー社やレヴィーに関心を持つ者がいたからであろう。それは先に示したように1880年2月18日の領事館裁判で、レヴィーに対し50フランの罰金が言い渡されたあとの「郵便報知新聞」は、2回に渡ってこの裁判を記事に取り上げているのでもわかる。なにかと横浜居留地で話題の多かったレヴィーだが、少なくとも4月28日の帰国の段階ではまた日本に戻る意志もあったとみえ、社主の任を譲ってはいなかった。

同じ新聞記者であり、「ジャパン・パンチ」の発行者でもあったワグマン（Charles Wirgman）は、1870年から1880年にかけての同誌にレヴィーを再三に渡って掲載し、その数は13点にも上っている。特に、1879年6月以降のこれらパンチ絵をみると、レヴィー側にはフランス郵便局取扱人で弁護士でもあったデグロン（H. Degron）とお雇いフランス人で建築家であったサルダー（P. Sarda）がつき、一方アルマンには高知藩で軍事教練を教えたアントワヌ（Emile Antoine）がついて、横浜居留地の小さなフランス社会を二分し争っていたことがよくわかる。ただ、ワグマンが描くレヴィーには、彼の帰国後の画が2点認められるだけに、この

ポンチ絵の分析は慎重さが求められる。

1880年12月31日をもってC.レヴィーは正式にレコー社の責任者の地位を退き、代って翌1881年1月1日よりL.レヴィーとサラベル（Stéphane Salabelle）の2名によって共同経営が続けられることになった。

C.レヴィーがレコー社の社主であった時代に、ここで発行されたと考えられる書籍に下記のものがある。これら全ての現本を確認できていないが、今後の調査課題として記録しておく（囲み数字は原本確認済）。

1. 1877年2月刊

Dr. A. J. Geerts, “Le Guide du Baigneur au Japon”, 50 Cents.

2. 1877年4月刊

Jonkheer Ph. F. von Siebold, “Nipon Gakoufu sept mélodies japonaises, arrangées pour Piano et Chant.”

3. 1878年8月刊

A. J. Geerts, “Les Produits de la Nature Japonaise et Chinoise”, 4 \$.

4. 1879年1月刊

“Les Laques et la Céramique du Japon”, 50 Cents.

⑤. 1879年10月刊

Henry von Siebold, “Notes on Japanese Archæology with especial reference to the Stone Age”

⑥. 1880年5月刊

“Voyages dans le Nord du Japon”, 1 \$.

上記の他に、1880年12月に刊行された『韓佛字典』（Dictionnaire Coréen-Français）、それと“L’Histoire de l’Art céramique au Japon”もC.レヴィーの時代にこの新聞社から出版された著書とみなされるが、これ

らの書の確認はできていない。

② L.レヴィー

弟レヴィー（Léon Lévy）は1874年（明治7）9月7日に兄の勧めで来浜し、1883年9月23日に帰国するまでの9年間、居留地183番のレコー社を守った人物である。1881年1月1日より同社の社主となったが、新聞の編集方針は兄の時代と変わらず、また営業業種も従前通りであった。ただ、少し変わったところでは、フランス製のリウマチに効く薬、シャンパンの販売も1882年代に行っている。もっとも、フランス製の薬に関していえば、兄の時代にあっても卸し売りをしていたことがあった。

レコー・デュ・ジャポン紙は、1876年6月より第1面の下段にフランス文学から適当な作品を選んで、それを連載小説の形で掲載していったが、これはレコー紙が廃刊になるまで踏襲された。この間の1882年9月より12月まで、日本の教科書にも採用されたことのあるアルフォンス・ドーデの「ジャック」が採り上げられている。

現在では、どの新聞であろうと連載小説が掲載され、紙面作りの上で欠かすことができない要素となっているが、邦字新聞では明治15年6月25日に創刊された「自由新聞」が、デュマの『一医師の回想』を「革命起源西洋血潮小暴風」として訳述したのを切っ掛けに、西洋政治小説が好んで訳され、各紙に続き物として掲載されていくようになっていったが、このレコー紙の連載小説などはその魁となるものであった。

競争相手であったクーリエ紙が1882年1月に廃刊に追い込まれていて、レコー紙の第1面をよく賑わせていたクーリエ紙に対する反論や投書がなくなり、その面では野次馬側の読者にとっては面白味が少なくなったと感じるようになったはずである。

L.レヴィーが編集責任者・社主となった1881年には、横浜では朝刊4紙、夕刊7紙（エディション・ド・ラ・マル版を含む）の計11紙もの英・

仏字紙が発行されていたが、どの新聞社も手を引こうとは考えてなく、まして人口の少ない横浜で2紙のフランス語新聞が発行されていたのは異常でさえあった。レコー社ではこの年、日本人を中心に15名の植字工、5名の記者と1名の通訳を抱えていたから、経営内容は厳しいものがあったはずである。L.レヴィーを描いたワーグマンの画に3点があり、その内の1点に「白昼にレコー・デュ・ジャポンから通訳の引抜き」とキャプションを付けた1882年9月の作品がある。これなど、レコー社がらみでなにか問題が生じたことを意味しているのだが、この事件の裏がとれない。

L.レヴィーが帰国する1883年代のレコー紙が発見されていないため、彼の帰国理由や帰国後の行動は一切知られてないが、1888年5月9日にベルリンで逝去している。この頃にレコー社で刊行された（と思われる）書は次の通りである。

1. 1881年2月刊

Le Général le Gendre, “Progressive Japan”, 5円

2. 1881年5月刊

“Grammaire Coréenne”

3. 1882年9月刊

“Voyages dans le Japon Central”, 1 \$.

4. 1882年8月刊

L. V. D. P. “Livre de Cuisine”, 1 \$.

5. 1882年9月刊

Edmund Naumann, “Les Eléphants japonais des temps passés”

6. 1882年10月刊

Harry Alis, “Hara-Kiri”, 1 \$.

③ S. サラベル

サラベル（Stéphane Pierre Salabelle）の記録も一切ないが、彼は1863年9月に上海から来浜し、横浜で酒類販売、家屋の斡旋、下宿、語学教師、土地・家屋契約書や各種証書類の代書業などを営んだX. サラベル夫妻の子息だったとみなされる。サラベル夫妻には2人の息子と2人の娘がいたが、多分その長男がステファンヌだったろう。

S. サラベルが横浜居留者名簿に掲載されるのは1881年版からで、この前半1880年12月28日に彼はレコー・デュ・ジャポン新聞社・印刷所の持主のひとりとなり、1881年1月1日より弟レヴィーと共同で同社を経営していくことになった。¹⁶⁾しかし、この弟レヴィーも1883年9月23日にフランスへ旅立ち、ひとり残ったサラベルは長いこと183番にあったレコー社を31番に移転して、1885年11月28日号までレコー紙を発行していった。

サラベルがレコー社の責任者となった頃の横浜居留地のフランス人の数は、1881年の164名を最高に、1882年には122名に減り、さらに1884年には101名にまで減少した。¹⁷⁾このようなじり貧状態に見切りをつけたサラベルは、フランス社会としては横浜よりも少し活気のある上海で新聞を発行しようと、1885年12月9日に横浜より上海へ向かった。

翌1886年初めより上海で「レコー・デュ・シャンハイ」と紙名を改め新しい新聞を刊行したものの、これは短期間で廃刊に追い込まれてしまった。

「前半來久しく横浜に於て發行しむたる佛字新聞レコ・ヂユ・ジャポンは、本年の春比より上海に移り、エコ・ド・シャンハイの名を以て引き続き發兌し居たるが、同地にて思はしき賣れ口なしと見え、先月廿二日以來全ク廢刊した由、氣の毒の事どもなり。」¹⁸⁾

「レコー・デュ・ジャポン」紙が廃刊になったあと、日本ではフランス語の新聞は発行されていなかったが、1890年に居留地70番のジャポン・ガ

ゼット社が印刷・出版部門を強化し、積極経営に乗りだした時、フランス語新聞の刊行が企画され、その編集責任者としてラトゥール (M. Latour) が迎え入れられた。この新聞は、下記に示す記事によれば1891年1月に入って発行されたらしいが、現在まで一部の原紙も発見されてなく、内容や体裁などは不明の幻の新聞である。

「横濱居留地七十番ガゼット新聞社内にて本年一月より發刊したる佛國新聞ル・ジャポンは、發刊の當時は随分紙數を出したるが、何分在留の佛人僅少なる爲め其収支相償はざるより本月三十日を限り廢刊すると云う。」¹⁹⁾

因に、1892年の横浜に於けるフランス人は男性89名、女性43名の計132名であった。²⁰⁾

9. フランス人の文化活動

横浜居留地では早くからクラブが設立され、アマチュアによる音楽や演劇が上演されていた。例えば、1863年12月1日には新しくでき上がったばかりのユナイテッド・サーヴィス・クラブ (United Service Club, #83番) のこけら落しの際には、アマチュアによって3本の笑劇が上演され招待された居留地の人達から大いに歓迎された。このような音楽・演劇活動は1871年以降ゲーテ座を中心に大きな盛り上りをみせていくが、幕末から明治中頃にかけてはフランス人による活動はあまりみられない。

音楽・演劇に限ってのことではなく、幕末期に盛んであった競馬、射撃、競艇、ボーリング大会といったものへの参加も、意外とも想えるほどフランス人の積極的な加入はなく、横浜居留地にあってフランス人はかなり遊離したり孤立した状況にあったと判断したくなるほどである。だから

横浜居留地のフランス社会（3）

とって、イギリスやドイツのようにクラブ組織を作って独自の活動もしているわけではなく、この面でのフランス社会は静寂そのものといった感である。

1872年7月に設立された日本アジア協会は日本〔学〕研究の重要な組織であったが、設立年度の構成員となる名誉会員や一般会員114名の中にはフランス人はただのひとりも含まれていなかった。また、明治10・20年代には居留地内に横浜読書会、横浜文芸協会、横浜男性読書連盟、横浜チェス・クラブ、山手リクレーション・クラブなど大小さまざまな会が組織・設立されていくが、フランス人を中心とした会合や協会の設立はなく、学術的な研究団体への個人の参加もみられず、またサロンのような雰囲気を持つ社交の場となるはずのクラブも、この頃にはフランス社会は横浜居留地には有していなかった。

横浜と東京在住のフランス人が中心となって、やっと横浜で設立された組織はアリアンス・フランセーズ（L'Alliance Française）で、明治36年（1903）10月21日のことであった。²¹⁾この第1回例会は、この年の10月6日にフランス人ミュラール（Léon Muraour）が山下町11番に新築・開業したオリエンタル・パレス・ホテル（Oriental Palace Hotel）において開催された。この会の活動は主に講演会と音楽会の二本立てで、明治41年以降はモリエールの作品などフランス演劇の上演が主なる活動となっていった。また、明治40年8月にはフランス領事館の2階に同会の図書室を設け、図書の貸し出しをする一方で、ここがフランス人が集う交流を深める場となった。

明治36年のアリアンス・フランセーズの設立までフランス人による主だった文化活動はほとんどないとしたが、小規模の音楽会や演劇会は7月14日の革命記念日や新年会の集いで仲間内ではあったが再三に渡って催されていた。例えば、1863年12月4日には砲兵、坑夫などの守護聖人である聖バルブ（St. Barbe）の生誕を祝って、居留地内の大きな倉庫を借り受け

て公使や軍人が集いバンドの演奏をしている。

また、1863年10月30日にイギリス人医師・ウィリス (W. Willis) はフランス艦に招待され、艦上での素人芝居を観賞し、その出来映えを賞賛している。この時の出し物も艦名もウィリスは記録していないが、この10月14日に井土ヶ谷で乗馬で散策中に浪人によって殺害されたカミュ (J. H. Camus) 少尉を偲んでの集いだったのかも知れない。このカミュ事件を契機としてフランス兵が横浜に駐屯し、フランス山を形成していくことになった。なお、この頃の横浜にはセミラミス、デュプレックスとモンジュの3艦が沖合に停泊していたが、デュプレックス艦は10月25日に横浜より上海へ出港していたので、先の艦上での演劇会はセミラミスかモンジュ艦のいずれかとなる。

数少ないフランス人の文化的な活動にあって、居留地でかなり注目を集めた音楽会があった。1871年(明治4)1月5日にフランス公使夫人・ウートレーとフランスの中国・日本方面海軍司令官・デュプレ提督の主催により、前年の12月に新築されたばかりのゲーテ座で催されたフランス負傷兵のための慈善音楽会がそれで、居留地における本格的な音楽会であった。そればかりでなく、演奏曲目もかなり明確に記録された本邦初の室内楽演奏会であっただけに、日本音楽史の上からも注目されてよいものである。

この慈善音楽会は居留地に住む各国の人たちとフランス海兵隊が出演して催され、まず最初はよく知られたコミック・オペラ「ザンパ」(Zampa)の四重奏で幕が開かれた。この際に、主催者のウートレー夫人もピアノの伴奏者として舞台に立った。次に、メンデルスゾーンの美しい二部合唱「わが愛を捧ぐ」(I would that my love; Ich wollt' meine lieb')が2人の婦人によって歌われた。この後はヴァイオリンとピアノの二部合奏、フランス艦・アルマの士官のフルートとピアノの二部合奏が演奏され大きな喝采を受けた。

次の出し物はナポリ民謡を歌曲に仕上げたというティト・マティー（Tito Mattei）の「ノン・エ・ヴェール」（Non e ver, ああ、いつわり）がイタリア音楽に造詣の深いジョードン（Jaudon）によって気持よく歌われた。この日の第一部の最後はグノー（Gounod）の「バッハ前奏曲第一番による冥想」（Meditation on S. Bach's first Prelude）で、四重奏にアレンジされ、ヴァイオリン、チェロ、オルガンとピアノによって演奏された。この出し物がこの夜の最高の出来映えだったという人もいた一方で、バッハはドイツ人、グノーはフランス人、いったいフランス人がドイツ人の心をわかるのかといった批判もでたようだが²²⁾、一般の聴衆にとっては大変に楽しい夕べの音楽会で、そのだれしもが満足していた。

夜10時、第二部が始まろうとしていた時、ゲーテ座の斜め向い側の86番コマーシャル・ホテルで火災が発生し、11時には全焼しホテルは灰燼に帰した。このため音楽会は中断され、第二部は開かれずに終わった。しかし、大変楽しい催しであったため、この第一部だけでも観客は満足したはずだったが、ウートレー夫人は全ての催し物が最後まで上演されるべきだとして、もう一晩この音楽会を開催することに決めた。

最初の公演から1週間後の1月12日に改めて開催された慈善音楽会は、初めに予定していたプログラムの第2部はそのままとし、第1部は「バッハ前奏曲第一番による冥想」だけをそのまま残して、残りの出し物は全て変更されて演奏された。この夜はまずコールコット（J. W. Callcott）の「魔王」（the Erl King）が「Le Roi des Aulnes」としてフランス語で歌われ、シューベルトの「ロザムンデ」（Rosamunde）をピアノとヴァイオリンとによる二重奏、ベッリーニ（V. Bellini）の「アンジョル・ディ・パチェ」（Angiol di pace）を二人の婦人が歌い、バルフ（W. Balfe）の歌曲「こんなに愛しているのに」（Si tu savais comme je t'aime）、そして前回と同じようにグノーの「冥想」と続き、無事に第一部は終わった。

第二部はメルカダンテ（G. R. Mercadante）の歌曲「Soave Imma-

gine」がカルテットに編曲されたもので幕を開け、フランス人・アラール（Allard）がニデルメイエル（A. L. Nidermeyer）の「ル・ラック」（Le lac）を歌い、ハイドンの「第一楽三重奏曲」（Haydn's first Trio）を3人の婦人がピアノ、ヴァイオリン、チェロを演奏しアンコールの嵐を呼びおこした。

音楽会はさらに続き、ゴルディジャーニ（Gordigiani）の「ラ・カメリア」（La Camelia）、グノーの「ナザレス」（Nazareth）が歌われ、アンコールとして「オ・サンクチシマ・ヴィルジニ」（O sanctissima Virgine）がそれに応えた。さらに合唱付きのソロが披露され、最後はフランス軍人たちによって「ラ・マルセイエーズ」が力強く歌われ、楽しく印象深い音楽会は成功裡に幕を閉じた。

横浜居留地にあつての音楽会で、これほど出し物が豊富で質の高いものはこれまでなかったため、若干の厳しい批評はあつたものの、聴衆はこれに大いに満足しウートレー夫人や彼女を助けた婦人達に感謝の意を表わした。それにしても、この居留地での音楽に対する人材が豊富なものには驚きを禁じえないものがある。

「横浜の外国人居留民は700人か800人の数でしかなく、大衆娯楽を支えることのできるのはその半数足らずに過ぎない。それにもかかわらず、千ポンド全てといかないまでも、それに近い金額がフランスへ送られ、負傷兵の救援資金を増やすことになろう。²³⁾」との記事があるように、700枚以上の入場券が売り捌かれた。その金額は約3千ドル、あるいは1万7千5百フランとの記録もあるが、いずれの額にしても入場料だけでは集められる金額でなく、フランス人居留民はもとより他国の人たちより多額の寄付金を含んでのものであつた。因に、1871年における横浜でのフランス人は83名、ないしは125名の数でしかなかつた。²⁴⁾この慈善音楽会を除くと、明治前半におけるフランス人による目立った音楽会や演劇会の活動はみられない。

明治4年の新聞広告に下記に示す興味を魅く文面がみられる。

「御披露

此度佛蘭西國より渡來仕御當港埋地曲馬跡に於て當月廿六日夜八字半より當夜限大芝居興行仕何卒御見物の諸君晴雨不拘賑々敷御光來之程偏に奉希候

五人詰 棧舗割

上棧敷一間賣切洋銀三枚

上の場所御壹人前同二枚

中同御壹人前同一枚

下入込同 金一分

横浜 百八拾三番²⁵⁾」

日本開港以来、外国から初めての見世物、サーカス団がきたのは1864年（元治元）3月6日のことで、10人の芸人と8頭の馬からなるアメリカ生まれの軽業師・リズリー（R. Risley）一座であった。横浜を中心に興行されたこのサーカスは、一宝斎芳虎の綿絵「中天竺舶來之輕業 元治元年三月上旬より横浜の地において興行之図」などでも知られていて、この3月28日の初日には各国公使や領事をはじめ外国人250人、日本人200人もが集まる大公演²⁶⁾となった。

リズリーの曲馬は最初のうちはもの珍しさもあって好評を博していたが、いつも同じ出し物ということで不人気となり、一座はこの年の5月には横浜で解散するはめになった。この後がリズリーの面目躍如の行動で、まずいらなくなった馬を使つての乗馬教室を開いたのを皮切りに、劇場、酒場、氷屋、牛乳屋、牧場、ホテルの経営に乗りだしていった。そして最後には横浜アメリカ領事館の郵便係であったバンクス（Ed. Banks）と手を組み、日本で最も評判の高かった軽業・曲芸・手妻師であった高野広

八、浜錠定吉、隈田川浪五郎ら女性3名を含む一行18名を連れ、アメリカとヨーロッパへ巡業の旅にでた。1866年12月5日のことであった。この18名こそ慶応2年に受けたパスポート番号1号より18号までの人たちで、次の19号より27号もまた曲芸師一座の松井源水らであった。²⁷⁾

松井源水一座は駒回しやうかれ蝶の技を得意とした人たちで、一座は女性5名を含め8名で、彼らはリズリーらより数日早い1866年12月2日に横浜を出港し、東洋航路でまずフランスへ向った。

先のリズリー一座の来日以降、外国からのサーカス一座の興行はしばらくみられなかったが、明治に入ってから最初のサーカスが先に示したフランス曲馬団、横浜の埋地曲馬跡での興行であった。

この新聞広告によると、明治4年8月26日の夜にまず曲馬が披露されることになっているが、この興行は早くも28日の夜に延期され、その28日も9月3日にさらに延期されていった。この遅延は会場の整備に問題があったのか不明だが、おそらく入場料が高かったため、見物人が集まらなかったからであろう。この後、この曲馬一座は東京の招魂社（のちの靖国神社）の境内でこの年の10月に興行したが、『江戸年表』によると入場料が高く面白くないと評判が悪かったという。

このフランス曲馬一座の規模などを示す資料はなく、団員の数も全くわからない。明治4・5年の横浜への入出港した乗船名簿を丹念に調査しても、それらしい一座の動向はつかめない。もっともサーカス一座の船での往来は上・中等の船室を利用せず、おそらく下等の料金を支払ったことだったろうから、乗船名簿からの追跡は無理があるが、どうやらこの一座はスリエ曲馬一座であったらしい。

「明治四年十月二十六日より、招魂社境内に於て、異國の男女曲馬の觀世物興行す。佛國スリエの一座なり。翌五年二月より、浅草寺奥山に於て興行す。」²⁸⁾

横浜居留地のフランス社会（3）

「明治の初年、スリエという曲馬師が来た、此の一座は、浅草の奥山其他にて、大天幕を張り、曲馬は素より喜劇をも演じたが、入りが無かった、此の喜劇中の首賣といふ一齣を、尾上菊之助といふ子役が演じた、」²⁹⁾

この一座は、このあと京都でも興行した。明治5年3月10日（1872.4.17）より約50日間京都で最初の博覧会が開かれ、沈滞していた京都に活を入れたが、この博覧会には外国人の入京も赦されたため、700名を越す欧米人がここを訪れ、それまで未知であった京都の魅力ある景観を宣伝することになった。

京都博覧会が終わってまもなくの明治5年7月、「外國大曲馬」と銘打ってスリエ一座の京都最初の興行が行なわれた。この時の出し物は馬上での曲毬、皿回し、逆立ち、あるいは空中ブランコなどスピード感のあるものであったが、特にスリエの娘の技が光っていたようである。この時の興行主・名代は軽業・曲芸の伝統を受けつぐ早雲長太夫と亀谷久米之丞で、興行場所は現在の南座に近い四條北側大芝居であった。

スリエは馬の調教師で馬術を教えたりしていたが、パリ万博の折に松井源水一座が大君一座と名乗ってパリのフランス・アンペリアル劇場（Théâtre du Prince Impérial）で興行していた時は、どうやらスリエの世話になっていたらしく、スリエはこの劇場のかつての支配人でもあったらしい。京都でのスリエ一座の引札や錦絵をみると、この時スリエは62歳の肥満の男であった。京都で初めて曲馬をみせたこのフランス人一座のその後の動向はつかめず、解散したものか他国へ向ったのかは不明である。

10. フランス共済組合

1880年8月28日、レコー・デュ・ジャポン社はフランス居留民のための

共済組合の創設を望む記事を公けにしたところ、早速フランス領事・ジュスタンがこれに賛同を示すと同時に100ドルの設立基金を提供し、数日の内に募金額は300ドルを越した。これに力づけられたレコー社は、すでに横浜に設立されていた「夫人ボランテア協会」(Ladies' Benevolent Association)が46名の人数でそれほど評判にもなっていないのに、かなりの公益を上げていることを紹介しながら、横浜と東京に住むフランス人にこのような協会を設立しようと呼びかけた。³⁰⁾

この提案に対して、この頃なにかにつけて敵対関係にあり反発していたライヴァル紙の「クーリエ・デュ・ジャポン」が賛成の意を表明し、9月中旬に同社の社主であるアルマンやその友人であったアントワーヌらが募金に応じ、この時点での基金は553ドルに達した。横浜居留地のフランス社会を二分していただけに、クーリエ紙側の賛同を歓迎したレコー紙は、公共の利益のために自尊心といった小さな問題を犠牲にしたと持ち上げ、この共済組合はなんら問題がなく順調に設立されるものと予測された。

フランス共済組合設立のための会合が、まず居留地20番のグランド・ホテルで1880年10月14日に開催され、X.サラベルが仮議長として選出された。この日の出席者は39名であったが、最初に発言を求めたアルマンは、この会合を呼びかける通知状がしかるべく発送されなかったとの口実をもとに、会合の延期を要求した。冒頭から波乱含みの設立会となり、アルマンの要求は出席者の投票に委ねられることになった。投票の結果、この申し出は24対15で拒決されたが、これを不満としたアルマンは席を立ち、彼に同調した13名もこの会場から立ち去った。

アルマンの退場理由はいまひとつはっきりしないが、どうやらこの会合への出席の数が少なかったことから延期を提案したらしい。通知状がもう少し早く郵送されていれば、少なくとも欠席者15名にはならないとアルマンは発言したが、これに対しレコー社のレヴィーは東京に在住するフランス人の大半が出席している以上、連絡が遅れたとするのは問題のすりかえ

横浜居留地のフランス社会（3）

であり、横浜に住む人達が出席できないわけがないとした。

さらに、フランス共済組合の創立に賛同し署名した人数は全部で49名であるから欠席者は10名であり、その10名のうち5名はアルマンにより出席しないように言われた人たちであるとの反論も示した。またしても、横浜居留地の小さなフランス社会は団結されることもなく、疑心暗鬼の分裂がなおも続いていくことになった。

アルマンと彼に同調した計14名が退場したあと、会議は平穏になんの問題もなく続けられ、まず委員任命の選挙が行なわれ、X. サラベル、H. デグロン、エスナール博士、H. ヴィネィとH. シャモナールの5名が選任された。この際に残って会合を進めた24名は下記の人たちであったが、このメンバーはアルマンの率いるクーリエ社と対立していた人物の³¹⁾はずで、小さなフランス社会を二分していた一派として興味ある氏名である。

de Balloy, Vinay, Blanc, Lévy, Degron, X. Salabelle, E. Boissonade, H. Chamonard, Dr. Hesnard, de Diesbach, baron Benoist-Méchin, de Lapeyrère, lieut. Bougouin, de Chanolle, de Mailly, de Galard, S. Salabelle, Reynaud, J. Levesque, P. Zicavo, Saltarel, Falque, baron Martin du Nord, Jacquet.

この顔ぶれをみると東京と横浜居留地の主だったフランス人で、穏健派の人たちだったとあってよい。会合は「フランス共済組合」(Société Française de Secours)の名称が採用され、規約の作成は指命された委員に委ねられ、会場を提供してくれたグランド・ホテルの社主ピエール・ジカーボに感謝の意を表して会議は修了した。

1880年11月5日、16条よりなる規約が定められ、それが会員や希望者に送付されたが、その節にこの規約に対して意見のある者は速やかに委員に申しでるよう言い添えられた。この規約は簡単に言うと下記のようなもの

であった。

1. フランス共済組合のもとに，慈善団体を置く。
2. 組合の主たる目的は，日本在住3カ月以上の資金不足のフランス人を援助するものとする。
3. 組合はすでに署名をした全フランス人をもって構成される。
4. 最低5ドルの募金に応じた人のみが議決に加わることができる。
5. 正会員は毎年事務局委員を選挙し，委員は会長，副会長，書記，会計と補佐役2名から成る。
6. 委員の再選は妨げない。
7. 資金は（パリ）割引銀行に預けるものとするが，緊急時に備え50ドル以内の金額は会計の手元に置く。
8. 会長ならびに1名の補佐役の許可なく，いかなる救済も会計より授けられない。
9. 補佐役は救済を願い出た者の必要性を確認し，それが現金でか，あるいはパン，肉，石炭などの引換券で授けるべきかの決定に，ことのほか任務を負わされるものとする。
10. 組合員は，会長が無料広告されるフランス語新聞を通して指示する場合に，3カ月毎に当然の権利として集会に参加する。
11. 緊急の会合が必要な際には，会長は緊急に召集できる。
12. (3カ月毎の)定期集会においては，組合ならびにその活動状況が手短かに口頭で報告される。各会員は当組合の業務が順調に行なわれるように判断される提案を申しでることができる。
13. 年次総会においては，組合の活動状況，正当な書類を付けて収支の会計報告をする。
14. 部外者に貢献しうる金品に加え，組合は缶詰，植民地の物産，新品並びに古着類の救援を受ける。
15. 組合の創設者が提示した目的を，結果的に変えるような規約の改正は

解散を導くことがあり、組合員に対しその醸出金の額に応じ返金することがある。

16. 組合の資金が不足となるような場合には、特別委員会が演奏会、演劇会、バザー等を企画するものとする。

上記の規約は先に記述した5名の委員会メンバーの連名により公表された。³²⁾しかし、対抗する「クーリエ」紙は1881年1月初めに、この組合はついに陽の目をみることがなかったとの記事を掲載し、なおもこの組合に反感を示していた。

フランス共済組合は1881年1月に来日したばかりのド・ロケット（G. de Roquette）公使を名誉会長に抱き同組合の信頼をはかり、この時点の基金は910ドルに達しかなり足場は固ってきていたから、当然「レコー」紙は先の「クーリエ」紙の記事に対し反論を示すことになった。

1881年3月12日、フランス共済組合の総会がグランド・ホテルで開催されたが、この時会長のX.サラベルが病欠欠席であったため、副会長H.デグロンが議長となり議事が進められていった。この総会では先の16条よりなる規約の一部手直しなどが行われたが、大きな取り決めは横浜総合病院の3等室の一床を、フランス共済組合員が負傷したり病気になった場合には自由に利用できるとする契約をデグロンと病院側のウィルキン（A. J. Wilkin）との間で結んだこと³³⁾であった。

規約も整い、基金もある程度潤沢になったフランス共済組合ではあったが、この組合の設立を早くから呼びかけ、また中心的な役割を果たしてきたデグロンが明治14年3月をもって逓信局顧問の役を解かれ、翌4月24日にフランスへ帰国してしまったため、この組合の活動は軌道に乗るところまでいかず、大きな目的を達成することなく終わった。

アルマンがレコー紙の編集を辞め、自らクーリエ紙を発行することになってから、横浜のフランス社会はなにかにつけ反目しあうことが多くなっていったが、それでも協力しあい団結することは多々あった。フラン

ス共済組合とは直接的な関連はないが、若干の事蹟を記録しておこう。

1875年8月、ヨーロッパから届く新聞はガロンヌ河の大氾濫を報じ、多数の犠牲者がでていることを伝えた。この報道を知ったフランス社会は対応も早く義捐金の募集を初め、レコー紙は紙上でその呼びかけ、さらに義捐金の申し込みに応じた第一次の氏名を公表した。³⁴⁾これに素早く応じたのは横浜のフランス人ばかりでなく、横須賀製鉄所や生野銀山の大勢のフランス人技師、さらに長崎の居留外国人を加え10月初旬までに2,535ドル余りの巨額な義捐金が寄せられた。³⁵⁾

このような義捐金の募集は1876年9月のスイスでの水害罹災、1879年4月のフランスでの特赦、さらには明治時代にあって最大の被害となった東京日本橋区より発生した火災（明治12年12月2日出火、焼失家屋10,613戸、死者24名、負傷者84名）³⁶⁾の際にも迅速に行われ、フランス居留民の慈善が如実に示されることが多々あった。

これらの場合、寄付に応じた人名やその額が逐次公表されたので、それぞれの時代にどのようなフランス人が日本に居留していたのかがわかると同時に、当該人物の名前が原綴りで記録されているため、これらのリストは意外に利用価値が高く重宝することがある。

11. フランス語学会

フランス留学を経験した学者を中心に、1880年（明治13）に日本において広くフランス語を拡めようという気運が起こってきたが、その目的のために1881年1月8日に「フランス文学会組織委員会有志」の名で、東京と横浜に住む大勢の日本人・フランス人にこの学会の設立祝賀会の開催を伝える案内状が発送された。この案内状によると、この設立祝賀会の式次第は次のようなものであった。

1. 明治14年1月15日午後2時、東京一ツ橋の帝国大学（法・理・文三学部）の講堂に於て祝賀会を催す。
2. 組織委員会会員による学会設立の趣旨説明。
3. 規約の審議と可決。
4. 学会設立に関する討議。
5. 定期刊行物の出版に関する討議。
6. 三河屋（東京神田三河町）にて午後5時より晚餐会。

この日の初会合に出席したのは約60名で、まずエコール・サントラルを卒業した古市公威が万場一致で議長に選出された。委員会メンバーにより会員の点呼と簡単な学会の設立趣旨が発表されたあと、規約の草案の検討に入った。出席した法学者のアペール、アリヴェ、リニャル神父や磯部四郎らによる修正案が発議され、いずれも可決された。規約に関しては原案通りほぼ認められていったが、当学会は会長を置かないとした1条だけが問題となり、かなり長い討論のすえ結局この会には会長、副会長、幹事2名と会計が置かれることになった。

この会合での最も大きな決議は、アペールとアリヴェの提案による仏和辞典の刊行と講演会か公開講座の設置をするということであった。一方、「レコー・デュ・ジャポン」紙がフランス文学会の機関紙として選定することが決められたことから、同紙はその後ひんぱんに開催される同会の会合を報道していくようになった。

三河屋に場所を移しての晚餐会には、会合に出席した人たち全てを含め60名以上が参加し乾杯とスピーチがとめどもなく続いた。まず、最初の乾杯は日本国のためにアペールが、その後はシブール大佐が日本海軍のために、X.サラベルが日本の若人に、H.デグロンが新しい学会の成功を祝し杯を揚げた。

一方、日本側も山崎直胤がたまたま体調を崩して欠席したボワソナードに乾杯を捧げたほか、古市公威、宇川盛三郎、光田三郎、山口半六、浜尾

新らが次々に挨拶を行なった。³⁷⁾

横浜のフランス人にも大きな期待をもって催されたこの会は1月29日、2月5日、2月8日などにも会合がもたれ規約の起草や会の研究目的に関する熱い議論が続けられていったが、この段階からフランス語学会の名称が使われていった。

明治14年3月5日、「フランス語学会」(La Société de langue française)の初講演会が東京木挽町の明治会堂において、会員約150名と招待客600名の出席のもとに開催された。これら出席者の中にはベルギー特命全権公使・ド・グルート(Charles de Groote)、山田顯義参議、谷干城中将、伏見宮、東京在住のフランス人教師と横浜居留の大半のフランス人がいたが、フランス公使・ド・ロケットが欠席したため出席したフランス人を残念がらせた。

この開会式でベルギー公使、山田参議が祝詞を述べ、宇川盛三郎が本会の設立過程の報告を演述し、ボワソナードが経済学に関して記念講演をした。この講演は堀田正忠により日本語で通訳されたこともあって大きな関心がもたれ、その仏文は全文新聞に掲載された。³⁸⁾

ボワソナードの講演のあと宇川盛三郎は日本で最も早くフランス語を学び、今75歳(筆者注 英俊は文化8年=1811年生まれ)になる村上英俊(松翁)を聴衆に紹介すると、英俊は今から40年前ひと言もフランス語を知らなかったとき、この言葉で書かれた化学の本を日本語に翻訳するよう言われ、蘭仏辞典を使い一語一語の意味を調べ、5年の歳月をかけ訳し終えたことなどユーモアたっぷりに語ったので聴衆は大いに湧いた。

会長・古市公威のシンプソン・トンネル開鑿に関する技術上の講演、谷干城の演説でこの学会の初めてのセレモニーは終わったが、間に陸軍教師団の一員で学会員でもあったダグロン(Gustave Dagron)が軍楽隊の指揮をとり、彼が最も得意とする曲のいくつかを聴かせ華を添えた。

邦字新聞でのこの初会合を伝える記事はあまり詳しくないが、「此會の

旨意ハ佛語ハ世界中に於て正しく且つ精密にして法律の如きハ最も佛語を要せざれば明瞭なる能ハざるが如く緊要なるに此語を修むる者僅少なるを憂ひ有志が結合して組立てたるものなれば別に會頭など稱する人ハなけれど會則を嚴にして將來の隆盛を謀らるゝものなりといふ³⁹⁾」といった記述がみられる。

フランス語学会はこれ以降月に2回の割合で個人の研究発表をする例会を開き、6月の段階で会員数も約200名に増加した。5月22日の例会で古市会長、宇川盛三郎、栗塚省吾、アペールとアリヴェよりなる幹事会に、いまだ日本にない佛和辞典の刊行という根本的な研究に力を注ぐべきだとの意見が提示され、同時にフランス語による「日本の地理と歴史」という本も発行すべきだとする意見もだされた。これが発行されると従来の大きな空白が埋められ、日本に居住しているラテン系の人たちにとって大いに重宝されるのは疑いがないと横浜居留地の外国人は大きな期待をよせた。

この佛日辞典に関わる12名の編纂委員が6月19日の会合で指名されることになったが、これに先立つ6月10日に学会員の上原某は次のような手紙をレコー・デュ・ジャポン紙に寄せた。⁴⁰⁾この投書によると、実際に利用しうる佛和辞典はいまだない。確かにこの種の辞典は2冊はあるが、その1冊は村上英俊がおよそ40年前（筆者注 英俊の『仏語明要』は元治元年＝1864年の刊）に刊行した『仏語明要』があるが、これは今では歴史的な意味あいでの価値しかない。もう1冊は上海で印刷・刊行された『佛和辞典』だけで、日本人は長いこと科学や文学の研究に専念してきたと述べ、具体的に辞典の編纂をどうすべきかを書き、3年後には利用しうる辞典が完全に刊行されるよう望むとして一文を結んだ。

フランス語学会の会合はその後も続き宇川盛三郎、フーク、薩摩藩に雇われたオジェ（P. Ozier）の発表などが行なわれたりしたが、学会の最も大きな目標であった佛和辞典の方は陽の目を見ることもなく終わらしく、学会の編になるこの辞典の存在は確認されていない。僅かに学会員で

あった森則義・野村泰亨の『佛和辞典』(1898年刊)、アリヴェの『佛和辞典』(1887年刊)などの小さな辞書が残されているに過ぎない。

この項は横浜のフランス社会とは直接的な関連はないが、この学会の活動報告等は「レコー・デュ・ジャポン」紙に最も詳しく掲載されたので、その若干を記述しておいた。

横浜居留地のフランス社会での断片的な事柄やものの初めに関するフランス人の動向は、稿を改めて発表することになろう。なお、いずれも当研究論集に発表したものだが、横浜居留地のフランスを取り扱ったものに次の拙稿がある。

- ・「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」(第28号。1985年6月。)
- ・「アルフレッド・ジェラルド——横浜に於ける水屋・瓦屋の魁——」(第32・33合併号。1988年1月。)
- ・「横浜居留地のフランス系ホテル(1863—1899)」(第34号。1988年6月。)

- 注 1) 'The Japan Weekly Mail' 1870.1.29.
2) "The China Directory for 1869." p.258.
3) 'L'Echo du Japon' 1880.5.3.
4) 「公文録」明治七年八月各課局伺 印書局十五。
「太政類典」第貳編第六十五卷 外国交際八 外客雇入二 二十。
5) 'The Japan Times' Overland Mail' 1868.3.26.
6) "Japan Herald Directory and Hong List for Yokohama. 1870" p.33.
7) 「公文録」明治八年七月課局 印書局廿五。
「太政類典」第貳編第六十五卷 外国交際八 外客雇入二 二十。
8) 注7)に同じ。
9) 'L'Echo du Japon' 1876.9.29.
10) 拙稿「横浜居留地のフランス社会(1)」(『敬愛大学研究論集』第44号1993)。
11) 「郵便報知新聞」明治13年2月21日。
12) 「新旧時代」第二年第七号。

横浜居留地のフランス社会（3）

- 13) 'L'Echo du Japon' 1880.5.4.
- 14) 「東京横浜毎日新聞」明治13年4月29日。
- 15) 「郵便報知新聞」明治13年4月30日。
- 16) 'L'Echo du Japon' 1880.12.30.
- 17) 'Summary of the Foreign Trade of Japan' for the year 1881, 1882, 1884.
- 18) 「朝野新聞」明治19年11月7日。
- 19) 「國民新聞」明治24年6月17日。
- 20) 'The Japan Weekly Mail' 1892.5.24.
- 21) 'The Japan Weekly Mail' 1903.10.24.
- 22) 'The Far East' 1871.1.17.
'The Japan Weekly Mail' 1871.1.7, 1871.1.14.
- 23) 'The Far East' 1871.1.17.
- 24) 拙稿「横浜居留地のフランス社会（1）」の外国人数を参照されたい。
- 25) 「横浜毎日新聞」明治4年8月22日。
- 26) 'The Daily Japan Herald' 1864.4.14.
- 27) 「海外行人名表」（旧政府之節免状申受之者姓名調） 外務省外交資料館蔵。
- 28) 「江戸年表」
- 29) 「都の華」第58号。
- 30) 'L'Echo du Japon' 1880.9.10.
- 31) Ibid., 1880.10.16 [Edition de la Malle].
- 32) Ibid., 1880.11.6.
- 33) Ibid., 1881.3.15.
- 34) Ibid., 1875.8.26.
- 35) Ibid., 1875.10.5.
- 36) 『明治聖世消防圖會』38頁。（明治32年刊）。
- 37) "L'Echo du Japon" 1881.1.22. [Edition de la Malle].
- 38) Ibid., 1881.3.14. Supplément.
- 39) 「郵便報知新聞」明治14年3月7日。
- 40) "L'Echo du Japon" 1881.6.18. [Edition de la Malle].